原発避難者訴訟オンラインシンポジウム(2020/12/5)

ふるさと

故郷剥奪という被害:

原発事故は人々から何を奪ったのか

「地域の価値」を奪った

原発事故

よけもとまさふみ **除本 理史** (大阪市立大学)

除本・佐無田(2020) 『きみのまちに未来はあるか? ― 「根っこ」から地域をつくる』岩波ジュニア新書



「地域」とは (除本・佐無田, 2020, p.i)

- 「地域」という言葉のあらわす範囲 = 重 層性がある: 小学校区のような身近な 生活圏、市町村・都道府県などの自治体、 あるいは「自由貿易地域」のように複数の 国をふくむ場合もある。
- ・以下では、国内の地域―とくに身近な生活 圏や、より広い範囲の自治体をさす。
- ※ 自治体とは単に市町村や都道府県という地方公共団体ではなく、住民がつくりあげる生活圏、自治の単位である

「地域と関わる」生き方

(除本・佐無田, 2020, pp.v-vii, 5-10)

- 近年、地域との「最低限のつきあい」の範囲を 越えて、より積極的に地域と関わろうとする人 たちが増えている。
- 自分が生まれ育った地域に限らない。都会で育った若い世代のなかで、あえて地方に移住し、地域と関わって暮らすことを選択する人たちが目立つようになってきた。
- ・また、移住する「定住人口」にはいたらないものの、観光にくる「交流人口」よりは深く地域に関わる「関係人口」という概念も出てきた。
- これらは「ローカル志向」「田園回帰」などというトレンドとして注目されている。

「ローカル志向」「田園回帰」という潮流





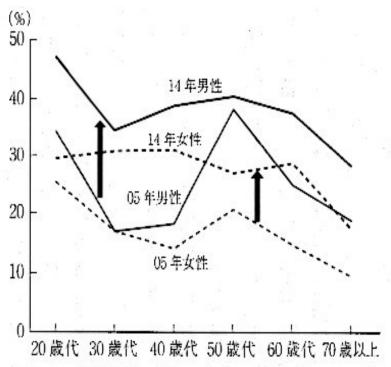


図 5-1 農山漁村に対する定住の願望を持つ人の割合(内閣府世論調査,2005年と2014年)

注:1) 資料=内閣府「都市と農山漁村の共生・ 対流に関する世論調査」(2005年実施)及び同 「農山漁村に関する世論調査」(2014年実施) より作成。

2) いずれも、「あなたは、農山漁村地域に定住してみたいという願望がありますか」という問いに対して、「ある」、「どちらかというとある」という回答の合計の構成比。

比較的若い世代 で地方移住志向 が上昇

(除本・佐無田, 2020, p.7)

なぜ「ローカル志向」「田園回帰」か? (除本・佐無田, 2020, pp.vii-viii)

- 「暮らしの豊かさ」の問い直し⇒ 「地域の価値」への気づき
- = 地域における人びとの営みの蓄積 (社会関係資本、伝統、文化、環境・景観 [農地、里山、まちなみなど] といった地域固有のストック = 地域の「根っこ」)が暮らしを豊かにする = 包括的生活利益(の一部)を構成

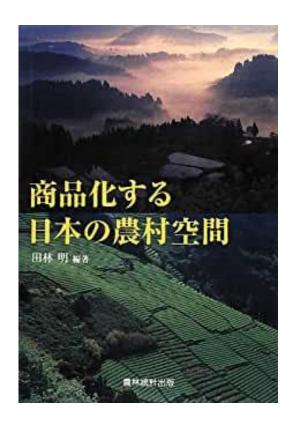
場所・空間の「消費」、農村空間の

「商品化」 (除本・佐無田, 2020, pp.viii-ix、16-18)

体験型・滞在型農村観光など

地域固有のストックが地域経済の「資源」に(cf:農業・農村の多面的機能)



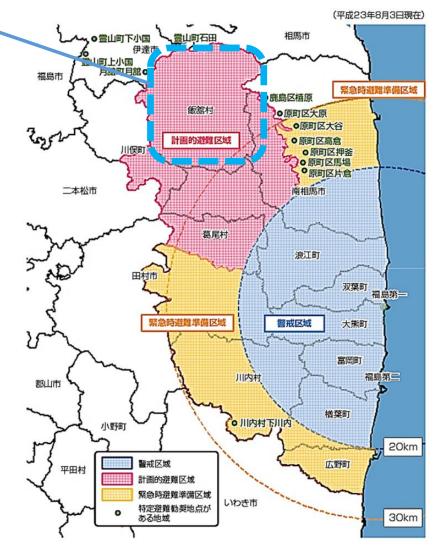


福島県飯舘村を事例として

(除本·佐無田, 2020, 1章)







飯舘村でのヒアリングから、80歳男性 の言葉(2011年8月)

- 一生懸命、村をよくしよう、楽しい村にしよう、 とみんなで本当にがんばってきた。「日本一美 しい村」を合言葉に、ようやくそれに近い線にき た。・・環境づくりも、みんなでこうしよう、ああし ようとがんばってきたんだよ。それなのにこうな るなんて、あきらめきれない。
- ・・・・こういうのは、ちょっとやそっとで、できるものではない。長い努力の成果でそうなってくる。〔それが今度の事故でひっくりかえされたのは〕くやしい。

飯舘村の地域づくり

- -1980年代から住民参加の発展、牛肉の産直を通じた村の「ブランド化」の取り組み
- -1994年に策定された第4次総合振興計画では「地区別計画」が作成され、地区・集落を単位とする地域づくりが本格化していった。
- ・とくに2004年に、村が合併しないことを決め「自立」の道を選択したころから、農家レストランを営む女性が地元のコメと水でどぶろくをつくり、それが村の名物となったり、オリジナル品種のジャガイモ等の栽培、加工品開発がすすむといった動きがあらわれていた

内発的な地域づくりと主体形成

- 1983年にはじまる第3次総合振興計画(3 次総と略)の策定プロセス
- •1986年に発足した住民の自主的な組織「夢創塾」
- •「若妻の翼」: 菅野村長が公民館長であった時期に、「人づくり事業」として取り組まれた(1989~93年)
- ⇒住民の学習・議論を通じて、山村の暮ら しの豊かさ(←地域固有のストック)を再評 価(=都市の「まなざし」とも一致)

飯舘村の地域づくりの展開を象徴的に示す事例: 喫茶「椏久里」

- •1992年に市澤秀耕・美由 紀夫妻が開業。
- ・「極久里」開業当初のコンセプトー「直売所併設の喫茶店」(「農業の一環としてやる店」)
- =家業(農業)を時代の潮流 にあわせてどう継承するか



「椏久里」開業(1992)後

- •「椏久里」の客層: 村内1割、50km 圏で7割、100km圏でほぼ10割。三近 隣の都市部からわざわざ訪れる客層 が多い。
- ・質のよいコーヒー + 農村立地
- ・農村立地=常識的には「短所」とみえるものが、重要な意味をもつ=「景 観価値」・・・「農村空間の商品化」

ブルーベリー生産の拡大途上での原発事故

- 2005年から自家畑をブルーベリー栽培用に転換
- 2007年から収穫できるようになり、収穫物はケーキやジャムに加工して販売。
- 2009年にはジャム工房をつくり、借地も 視野に入れて、ブルーベリーの増産を めざしていた。 ⇒ 原発事故(2011.3)

避難先での再開(2011)













椏久里珈琲 福島店

住所 福島県福島市東中央3丁目20-2

電話番号 TEL: 024-563-7871 FAX: 024-563-7887

営業時間 9:30 - 19:00

定休日 第一月曜・毎週火曜日

E-mail info@agricoffee.com



原発事故で失われたものは何か

「(再開した)福島店は多くのお客さまに ご来店いただき、賑わっている。だが、 阿武隈山地という立地条件を活かし ながらお客さまに満足していただける店 を、という創業の動機を失ってしまった | 「よいコーヒーとよい空間でお客さんに 満足していただく店という、もう一つの動 機を一層大事にして仕事を進めている が、片肺飛行のような心理情況になる こともある」

T町W糀店(味噌製造販売業)の 事例

- ・周辺の自然環境や、地域の社会関係との 一体性=営業損害の賠償では回復不能
- ・Wさん「農的生活」(味噌製造販売業をこう表現)~竹林を整備してタケノコをとるなど、 周囲の自然環境の利用と家業を結合

季節ごとの自然の恵みを商品にそえ、経費をかけずに顧客満足を高める/ 周囲の環境を整備することで訪れる客を楽しませる景観的価値/ 代々続いた人間関係のなかでの信用が商売にも役立つ

まとめ

・地域固有のストックによる利益(「景観価値」 のごとく、個々人が享受していた利益を含む)の喪失 ⇒個別経営体の営業再開、利 益回復でつぐなわれるものではない

(営業損害や財物の賠償でカバーされない[←地域固有のストックの多くはこうした性質のもの]包括的生活利益の毀損が重大 =絶対的損失)

- ・これまで培われてきた「地域の価値」を正当 に評価した賠償(絶対的損失への償い=ふるさと喪 失慰謝料)が必要
- 失われたものの「価値」を明らかにすること こそが暮らしの復興につながる